

本報告書の要約

第1章 小学生の学習に関する意識・実態

第1節 小学生の学習行動

1. 学校での学習の様子

① 好きな教科・嫌いな教科

小学生が好きな教科のベスト・スリーは、「図画工作」「体育」「家庭」の順で、およそ8割の子どもがこれらの教科を「好き」と回答し、第4位の「音楽」を加えて上位4教科はいずれも実技系の教科である。好きな教科には性別によって大きな差があり、ジェンダー・バイアスが大きい（図1-1-1、表1-1-1）。

② 授業の理解度

授業を理解している割合は、「理科」が72.6%、「国語」が71.2%、「算数」が69.1%とおおよそ7割である。好きな教科で Worst であった「社会」は理解度も低く61.5%である。また、授業を理解することが授業を好きになることの非常に重要な要素となっている（図1-1-2、3、表1-1-2）。

③ がんばって勉強したい教科

がんばって勉強したい教科（非実技系）は、「算数」が断然多く50.9%、続いて「国語」が33.6%、「社会」が32.5%、「理科」が24.6%、「総合的な学習の時間」が21.7%となっている。また、教科の理解度とがんばりたい教科とはほとんど相関がない。つまり、その教科を「わかる」「わからない」とがんばって勉強したいか否かは関係がない（図1-1-4、5、表1-1-3）。

④ 授業の受け方

「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」が88.8%など、小学生の授業中の学習態度は全体としてはまじめである。しかし、「授業時間になっても教室に入らない」が10.6%など、授業に参加・集中しない傾向もややみられる。また、新学力観のもとで授業がわかりやすく楽しくなり、「落ちこぼれ」と呼ばれる子どもたちが減少している。しかしその一方で、「吹きこぼれ」と呼ばれる子どもたちが増加している（表1-1-4、5、6、7）。

⑤ 好きな学校の勉強方法

小学生が好きな勉強方法は、第1位が「パソコンを使ってする勉強」で、91.3%の子どもが「好き」と回答している。続いて、「学校外のいろいろな場所に行ってする授業や調査」「グループで何かを考えたり調べたりする授業」「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」などで、いずれも8割を超える子どもが「好き」と回答している。新学力観や総合的な学習などと結びつきやすい勉強方法と同時に、従来からの基本的な勉強方法も好まれている（図1-1-6、7、表1-1-8）。

2. 家での学習の様子

① 家での学習時間

平日の家庭学習時間が2時間以上である割合がこの11年間で10ポイント以上も減少し20.8%になった。また、休日の家庭学習時間の2時間以上の割合も、第2回調査の16.1%と比べて4.4ポイント少ない11.7%となった。これに対して、平日のテレビ視聴時間の2時間以上は11年間ほとんど変化がなく、75%前後となっている（表1-1-9、10）。

② 家での学習の様子

小学生の家庭での学習態度は、学校でのそれと同じように、まじめできちんとしている。家庭学習のけじめや計画性とかかわりの深い質問項目に対しては、「計画を立てて勉強する」の56.9%、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」の77.6%など、5割弱から8割弱の小学生があてはまると答えている。11年間の変化をみても、小学生は、けじめや計画性を持った家庭学習をする傾向を強めている（表1-1-11、12）。

③ 日常生活の中での「学習」

日常生活の中での「学習」で、もっとも多かったのは「読みたい本を本屋さんで探して買う」の69.7%、続いて「文学・小説・物語・童話などの本を読む」の68.6%、「家でペットや動物・植物の世話をする」の62.7%であった（図1-1-8、表1-1-13）。

④ 家庭環境

「お母さんは私の成績をよく知っている」（第1回85.8%→第2回77.9%→第3回77.4%）をはじめ、「お父さんは私の成績をよく知っている」「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」などが減少しており、親はかつてほど子どもの勉強を管理していない（表1-1-14、図1-1-9）。

3. 学校外の学習機会の利用

① 学習塾の利用

第1回調査から第3回調査まで、いずれの調査時点でもおよそ3分の1の子どもが「学習塾」に通っている。「家庭教師」「通信教育」「宅配教材」は、第2回調査から第3回調査にかけて利用率が減少している。地域別にみると、大都市では45.8%が「学習塾」に通っているが、地方都市の通塾率は34.2%と大都市に比べて低くなっている。塾のタイプ別にみると、地方都市では、「補習塾」に通う割合が高いのに対し、大都市では、20.7%が「進学塾」に通っている（図1-1-10、表1-1-15、16、17）。

② 習い事・おけいこ事

もっとも多く行われている習い事・おけいこ事は、「スポーツ」47.4%で、続いて、「音楽」25.4%、「習字」22.0%となっている。性別では、男子では「スポーツ」が多く、女子では「音楽」と「習字」が多くなっている。また、大都市では、「音楽」「スポーツ」が多く、地方都市では「スポーツ」「習字」「英語」が、郡部では、「そろばん」と「何もしていない」が高い割合を示した（図1-1-11、表1-1-18）。

③ メディアの利用

およそ8割の子どもが学校でパソコンを使い、5割強の子どもが家でパソコンを使う。インターネット利用率も学校が4割、家庭が3割強である。パソコンを含めたニュー・メディアを利用した学習教材の利用率の累計は第1回調査の63.0%から第3回調査の89.8%へと増えている（図1-1-12、13）。

第2節 小学生の学習観・成績観

1. 成績観

① 成績の自己評価

第1回、第2回、第3回調査ともに、自分の成績が「上位」と答えた割合が29～31%と、およそ3割。「中位」が33～34%、そして、「下位」が32～36%とほぼ均等な値で安定している。算数は男子が、国語は女子がよい成績をとっていると回答する傾向がある（図1-2-1、2、表1-2-1）。

② 成績観・学力観

子どもたちは成績や学力に関してアンビバレントな考えを持っていて、「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」が62.3%いるかと思うと、他方では「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」も67.0%いる（図1-2-3、表1-2-2）。

2. 学習していて感じること

不思議さやすばらしさを感じることに限っては、「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」が81.6%、好きだったり意欲があるかについては、「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいなと思う」が71.1%ともっとも高い（表1-2-3、4、5、6）。

3. 学習上の悩み

「問題が解けたり、何かがわかるとうれしい」が81.0%、「新しいことを知るのが好きだ」が62.3%と回答しており、“新学力観的な意味”で学習に対して肯定的である。「もっと成績をよくしたい」が80.3%で成績志向も強い（表1-2-7、図1-2-4）。

4. 進路・進学意識

① 中学受験と希望する進学段階

中学受験希望率は、第1回15.7%→第2回17.7%→第3回17.9%であった。将来希望する進学段階は、「わからない」が第1回調査と第3回調査の間で12ポイントも減少し、小学生の進路意識は明確化している。また、「中学校まで」「高校まで」「専門学校・各種学校まで」の合計が28.1%から46.6%へと増加した一方で、「短期大学まで」と「四年制大学まで（大学院を含む）」の合計が38.9%から30.7%と減少しており、高学歴志向は弱まっている（図1-2-5、表1-2-8、9）。

② 将来つきたい職業

将来つきたい職業を具体的に記入してもらったところ、カタカナ名の職業が多数あった。また、スポーツ選手や専門職、社会＝経済的地位の高い職業のほか、美容師やペットショップなどの華やかで技能を伴う職業が多くあげられている。

第2章 小学生の学習到達度

第1節 算数

1. 出題のねらい

学習指導要領で示されている「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の4領域についてかたよりなく調査することを基本とした。

2. 通過率・得点分布

「数と計算」「量と測定」「図形」の3領域では、21問中17問で通過率が60～80%台と比較的安定していた。しかし、「数量関係」の領域では、通過率にばらつきがみられた。得点分布をみると、右にかたよった山型を示し、今回の調査の結果は良好であった。ただし、半分以下しか正解できなかった子どもも2割に上る（表2-1-1、図2-1-1）。

3. 調査結果解説

「数と計算」……現行の学習指導要領に示されている4年生までの範囲の整数・小数・分数の四則計算(①(1)～(10))は、57.5～87.4%の通過率であった。小数の問題の通過率がやや低く、小数点の位置のつけ間違いや小数点をそろえないで計算する例が目立った。また、除法の性質についての問題(②)の通過率が極端に低く、わり算の計算の手順はわかっても、その意味理解が十分でない様子がうかがえた。

「量と測定」……長方形の面積を求める公式を答える問題(③(1))の通過率は83.0%であったが、実際に求積する問題(③(2))は87.5%だった。また、複合図形の求積(③(3))では、65.2%と通過率が低下した。

「図形」……正三角形の判断(④(1))は、完全解答としたため通過率が8割弱となったが、おおむねよくできていた。また、二等辺三角形の証明の問題(④(2))も、定義を踏まえた解答が多く、通過率も74.8%と良好であった。

「数量関係」……2つの変量のきまりをみつける問題(⑦)では、きまりに気づくことはできても、それを適切に表現する力は十分でないことがわかった。

4. コメント

成績のよい問題をみると、その多くが処理の仕方を知っていて、形式的に処理できるものである。しかし、きまりをみつけ、解決することが求められている問題は通過率が低く、きまりをみつける力やその態度が弱いように感じる。算数は計算などの手続きを覚えて、その手続きによって処理するという算数観を子どもが持っているのではないかと感じる（杉山吉茂）。

全体の得点分布をみると比較的よくできているが、半分以下しか正解できない子どもが2割に上る。基礎・基本をしっかりと身につけさせる学習やくり返し学習、個別指導などを一層充実させる必要がある。なお、本文では、通過率を目安として分析を行った（伊藤説朗）。

第2節 国語

1. 出題のねらい

「音声言語」「説明的文章」「文学的文章」「言語事項」の4領域から出題し、新学習指導要領の実施を目前に控えているので、現行学習指導要領とともに新学習指導要領における取り扱いにも対応できる調査項目を作成した。

2. 通過率・得点分布

「音声言語」「説明的文章」「言語事項」の領域では、問題によって通過率にかなり大きなばらつきがあった。また、算数と国語の相関をみたところ、両者には正の関連があり、その相関性は中学生よりも高かった（表2-2-1、図2-2-1、2、3）。

3. 調査結果解説

「音声言語」……聞き取りの問題(①(1))では8～9割程度の通過率であり、結果は良好であった。しかし、聞き取った内容をもとにして自分の考えを表現する問題(①(4))では、自分の意見をまとめている正解は約4割にすぎず、提起された課題を自分の問題として考えている子どもは少なかった。ただし、聞き取り内容のくり返しなど準正解を含めた通過率は8割で、解答しようとする意欲は感じられた。

「説明的文章」……段落相互の関係をとらえ、文章の中心的事柄を読み取ることができるかどうかをみる問題(②(4))の通過率が20.3%と低かった。著者の主張がまとめられている段落を選ぶ必要があったが、誤答のほとんどがその前の具体的な数値が提示されている段落を選んでいて、

「文学的文章」……心情の変化をとらえる設問(③(3)(4))は難易度がやや高いと考えていたが、いずれも6割台の通過率であり、予想以上の好結果であった。続き話の創作(③(6))は、「空欄」が少なく、どの子どもにも書こうという意欲が感じられた。

「言語事項」……漢字の読み(④(1))、漢字の書き取り(④(2))、熟語の書き取り(④(4))では通過率にばらつきがあり、間違えやすい漢字をていねいに指導する必要性を感じる。また、ローマ字の読み・書きの問題(④(3))の通過率が極端に低く、指導が十分でない様子がうかがえる。

4. コメント

調査結果の検討・活用の際には、内容領域全体としての把握と同時に、設問の内容に即して学習状況にどのような傾向が認められるか、どのような問題が提出されているか、検討を加えることが求められる。本文では領域ごとに検討を行った（尾木和英）。

全体的な傾向では、「文学的文章」の通過率が高く、「音声言語」の小問も50%以上を示し、比較的安定している。それに対して、「説明的文章」と「言語事項」の領域は、結果にかなりのばらつきがみられる。特定の分野で通過率が低いところは気になるところである。本文では領域ごとに結果について考察を行った（大熊 徹）。

第3章 学習に関する意識・実態と学習到達度の関連

第1節 小学生の学習行動と学力

1. 「学習到達度に関する調査」の得点分布と学力階層

「学習到達度に関する調査」の結果から、子どもの算数、国語、2教科合計の学力を示す「学力階層」変数を作った。「学力階層」変数は、算数と国語のテスト結果から偏差値を求め、偏差値にもとづいて算数の学力階層、国語の学力階層、2教科合計の学力階層の3つを作成した。これら3変数のうち、算数と国語の学力階層の間には強い正の相関があった。性別では、国語と2教科合計で女子のほうが学力階層の「上位」に多い傾向があった（表3-1-1、2、3）。

2. 学校での学習の様子と学力

① 好きな教科・嫌いな教科と学力

算数が好きな子どもは算数の学力が高く、国語の好きな子どもは国語の学力が高い傾向がある。しかしながら、興味深いのは国語、社会、理科の教科を好きでも算数の学力は高くなり、むしろ、それらの教科を「好き」だと回答している子どもは、算数の学力が低くなる傾向がみられることである。同じように、社会、理科を「好き」だと回答している子どもは、国語の学力階層で「下位」の割合が高くなる傾向がみられる（図3-1-1、表3-1-4）。

② 授業の理解度と学力

算数の学力階層の違いによって算数の授業の理解度は大きく異なり、同様に、国語の学力階層の違いによって国語の授業の理解度は大きく異なる。それだけでなく、算数や国語の学力が高いほど、他の非実技系教科（国語、社会、算数、理科）の授業の理解度も高くなる。このことは、算数や国語が非実技系教科の学習の基礎教科的な役割を果たしている可能性を示唆している（図3-1-2）。

③ がんばって勉強したい教科と学力

学力が低い子どもは学力の向上をあきらめて、勉強をがんばらなくなるという見方がある。しかし、第3回調査の結果では、むしろ、算数、国語、2教科合計の学力が低い子どものほうが高い子どもよりも、国語や算数をがんばって勉強したいと思っている（表3-1-5）。

④ 授業の受け方と学力

授業中に逸脱的行動を行わない子どもは、算数、国語、2教科合計ともに学力が高い。また、肯定的な授業態度も高い学力と結びついている。しかし、軽度のおしゃべりや必要以上にいてねいにノートをとることには学力階層に与える効果を読み取ることはできない。テストに関連しては、くやしいと思う気持ちや間違えた問題をやり直すことが高い学力に帰結している（表3-1-6）。

⑤ 好きな学校の勉強方法と学力

「パソコンを使ってする勉強」は上位層から下位層までがまんべんなく好きな勉強方法であり、学力階層による差が小さい。それ以外の勉強方法についてはいずれも、学力階層によって「好き」と回答する割合の差が非常に大きい（表3-1-7）。

3. 家での学習の様子と学力

① 家での学習時間と学力

算数の学力階層が「上位」の子どもほど勉強時間が長くなり、「下位」の子どもほどテレビ視

聴の時間が長くなる。国語と2教科合計の学力階層別にもほぼ同じ傾向が読み取れた（図3-1-3）。

② 家での学習の様子と学力

家庭での学習方法や態度が学力階層の分布に与える影響をみたところ、けじめや計画性のある子ども、まじめな学習態度の子どもは学力が高いことがわかった。なかでも、宿題をきちんとやることが学力を高める効果は非常に大きい。反対に、中途半端に勉強を終わらせてしまう態度が学力を高めることの障害となっている。ただし、第3回調査からは、がまんして机に向かわせることは学力を高める上であまり効果がないという結果になった（表3-1-8）。

③ 日常生活の中での「学習」と学力

学力上位層ほど日常生活の中での「学習」を行う傾向がある。しかしながら、「自然や動物・植物の本を読む」「家でペットや動物・植物の世話をする」などの自然や動植物にかかわることからでは、学力下位層ほどよく行っている。また、国語の学力階層が「上位」の子どもは「下位」の子どもよりも、歴史や文学・物語、新聞のニュースなどに接する機会が多い（表3-1-9）。

④ 家庭環境と学力

学力が高い子どもの家庭ほど学習環境に恵まれている。ただし、「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」のは、学力下位層の子どもの家庭のほうが多い。学力が高い子どもの保護者は、勉強をするように言うよりは、ふだんから話し合ったり、勉強をみてあげたり、子どもの学業の状況を知るようにしている（表3-1-10）。

4. 学校外の学習機会の利用と学力

① 学習塾の利用と学力

通塾状況別にみると子どもの学力階層分布に顕著な差があった。学力上位層が多いのは、①「非通塾者」よりも「通塾者」、②「2日以下」よりも「3日以上」の通塾、③「補習塾」よりも「進学塾」への通塾、④「3時間未満」よりも「3時間以上」の学習をしているといった特徴を持つ子どもたちである（表3-1-11）。

② 習い事・おけいこ事と学力

学力階層の違いによって、習い事やおけいこ事の利用率に差がある。算数の学力階層別にみると、「音楽」「スポーツ」「英語」などで学力上位層ほど利用率が高い。同様に、国語の学力階層の「上位」と「下位」の差をみると、「スポーツ」の差は小さくなる一方で、「音楽」「英語」に加えて「習字」でも大きな差が生じている。これらは、学力階層が「上位」であるほど利用率が高い。（表3-1-12）。

③ メディアの利用と学力

パソコンやインターネットの利用に関して学力階層による差があり、上位層ほど家や学校でパソコンに触れたり、インターネットを使って何かを調べたりすることが多い。その他のメディアに関しては、学力階層による差は小さい（表3-1-13）。

第2節 小学生の学習観・成績観と学力

1. 成績観と学力

① 成績の自己評価と学力

学力階層によって成績の自己評価が大きく異なっている。しかし、学力階層が「下位」であっても今の成績がクラスで「上位」や「中位」であると自己評価する子どもが多く、その割合の合

計は45.0%にも達する（表3-2-1）。

② 成績観・学力観と学力

学力上位層ほど学歴獲得を目指した学力向上を望んでいる。それに対して、下位層ほど、そこそこの学力で満足する。この背景には「そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう」という現状認識が影響している（図3-2-1）。

2. 学習していて感じることと学力

算数の学力が上位であるほど算数だけでなく、国語、英語、社会に関する関心、意欲が高い。また、国語では、すべての教科にかかわる項目で学力上位層ほど関心、意欲も高くなっており、階層ごとの差も算数の場合よりも大きい。このことは、国語の学力が他の教科の関心、意欲を支える基礎的な学力となっている可能性を示唆している（図3-2-2）。

3. 学習上の悩みと学力

学力の低い子どもは高い子どもよりも学習の難易度と覚える量の多さに困難を感じている。さらに、学力の低い子どもは高い子どもと比べて学習に対して疎外的である。しかし、学力下位層は上位層よりも学力向上意欲が強い（図3-2-3）。

4. 進路・進学意識と学力

学力上位層は下位層に比べると、中学受験を希望する割合が高い。さらに、「四年制大学まで」や「大学院まで」の進学を希望する割合も高く、将来進みたい学校段階は、現在の学力と相関していることがわかる（表3-2-3、4）。